

道徳通信かがわ

第25号

平成29年10月13日（金）

香川県教育委員会事務局

義務教育課

毎日、新聞配達をする明は、ある日、新聞を1枚、配り残してしまいます。その日は、塾の進級テストの日。それでも明は、配られていない家を探すため、一軒一軒訪ねていきます。途中、雷雨に襲われても、1枚の新聞を小脇に抱えて雨から守りながら。やっと1枚の新聞を届けることができた明は、結局、塾には間に合いませんでした。それでも心の中でつぶやきます。「これでいいんだ。」と。

この「1枚の新聞」という資料で、10月5日、道徳の総合授業リーダーの公開授業が行われました。丸亀市立飯山北小学校・尾崎佳央里教諭の授業を紹介します。

自己を見つめる（その2）－総合授業リーダー公開授業－

主人公の行動に憧れるからでしょうか。子どもたちは、「ぼくだってできるよ。」「同じような状況でも、新聞を待っている人のために、私も新聞を配ると思う。」と考えがちです。

そこで、授業者は揺さぶります。

「みんな、水泳や、空手や、英検など、『進級テスト』みたいなもの、受けたことある？」

子どもたちは、ここで初めて、明のような行動をとる難しさに気付きました。

「1回逃したら、次に受けるまでに何か月も待たなければならない。」

「今まで頑張ったことが無駄になるのは…きつい…」

さらに授業者は、問いかけます。

「雨の日に、お家の人に車で送ってもらう人、いるよね。どうして？」

「だって、ぬれたらいやだもん。」

「靴下がぬれたら、気持ち悪い。」

（あれ、もしかしたら、明君のように、できないかも…。）

思考は、具体的な場面や状況の中で動き始めます。これらの授業者の発言は、まさに、その「具体」を呼び起こすものでした。



「自分事として考える」ことが道徳の授業で求められています。しかし、「あなただったらどう?」「自分とつないで考えてごらん。」という問いかけだけでは、子どもたちの心から経験を掘り起こせません。もう一步、具体的な生活場面を思い出させることで、「え、そういえば…。」と子どもたちは、初めて、本当に「自分を見つめる」ことができるのでしょうか。そして、「観念的な正しさ、美しさを堂々と語るよりも、自分の失敗や弱い部分に気づき、恥じらいながらもそれを表出する方が人間らしい」、そんなことを感じさせる授業でした。

授業の最後には、授業者は、「このクラスにも明君がたくさんいます。」と、おもむろにグラフを取り出し、学校のリーダーとして、あいさつボランティアに取り組む子どもが、8人から23人に増えたことを伝えました。

授業の途中までは、子どもたちは、「明君のようにできないかもしれない。」と少し気弱になっていました。しかし、この事実を知り、今の自分の成長にまた自信をもった子どもたちは、きっと、心の中でつぶやいていたのではないのでしょうか。「これでいいんだ。」と。

